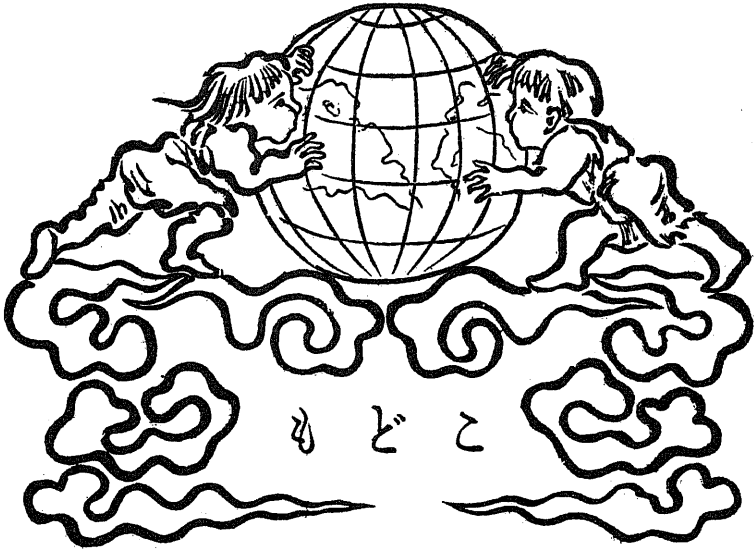


も どり と 人 婦  
號 四 第 卷 叅 第



伊 伴 物 語

やまとの翁

今 度 も も 一 つ ロ シ ア の  
お 話 を し て 見 ま し ょ う 。

ま づ あ る 所 に、 伊 伴 と い  
ふ 一 人 の 若 者 が 居 り ま し た。  
あ る 日 の こ と 何 か お 金 儲 を  
し て 来 よ う と い ふ の で、 一  
人 で、 家 を 出 け ま し た。  
さ て、 だ ん く 出 け て 行 っ

て、とーく或不思議な國へ行つて、三年間九十圓といふ約束で、其處の大百姓に雇はれることになりました。それから正直に、一生懸命に働きましたから、三年目のお仕舞に、主人から十圓の金貨を九枚貰つて、喜び勇んで、其家を出かけました。所が、だんく歩いて來まして、一つの川の所まで來ると、伊伴は、ひよいと立ち留つて、ポケットから金貨を三枚出して、其川の中へ投げ込みまして、獨り言をいひます『若し僕が全く正直者だといふことなら、此金貨は、今に泳いで僕の手許へ戻つて來るのだ』これで、伊伴は自分の正直か、どーかを試す積りなんでせう。

そこで、伊伴は川の岸の所へ、寝轉んで待つて居ましたが、

其中に思はず、眠り込んでしまった。どの位長く寝入って居たかは、誰も知らない。併し暫らく立って目が醒めたから、急いで川へ居って見たが、悲しいかな、金貨の影も見えない。そこで、又ポケットから、残りの金貨の中で三枚取って川の中へ投げ込んで置いてまたく岸で眠って居て、暫らくして行って見たが、矢張金貨の形は見えませんが、仕方ないから、三度目には、お仕舞の三枚も投げ込んで仕舞って、さて行って見た所が、これは不思議！、金貨が九枚ながら、ちやーんと揃って、伊伴の方へと水の上を浮いて來ます。

そこで、伊伴は、『さし、これで僕は全くの正直物だ』といって大變に安心をして、其金貨九枚を　ポケットの中へ押し込



んで、氣も足も軽くなつて、急いで行きました所が、道で、五人のロシア人が、荷馬車に一杯荷を積んで來るのに出遭ひましたから、『其荷は何だ』といつてきゝますと、『香だ』と答へました。夫で、伊伴は、ポケットから、前の金貨を取り出して、すぐに其香を買ひ取つて、ロシア人どもと別れました。そこで、火を焚いて、其香を焼いて見た所が、驚くべし、何處でもなく奇麗なく、音楽が聞こへて、一人の夫はく美しい羽の生へた天女が天降つて來て、ほがらかな聲で、伊伴に申しますには『伊伴や伊伴や、汝は只今、希代な名香を焼いて神様を祭つたから、其志に愛でよ、神様は、汝の好きな者を何でも下さるとの事、汝の好むものは、王國なるか、世界の富か、夫とも美し

い姫であるか、遠慮なく、申し述べよ』

伊伴は、之を聞きまして、暫くは難有涙に咽びました、やがて其天女に申しますには、『夫はく有りがたいお言葉、併し私一人では、どれが一番宜しーか、さっぱり分りませぬから、暫くの間お待ちくださいませ、向うで畑をしてる人の所へ行つて、一寸尋ねて見ますから』といって、ちよーど其時に畑で鋤を使つて居る人が居りましたから、いきなり其側に走つて行って聞きました『伯父さん、伯父さん 神様に何を貰へば一番いーのだらう、王國でしよーか、世界の富でしよーか、夫ともいーお姫様でしよーか』といった所が、其百姓の申しますには、『私はそんな事は知らない、誰だつて人の事を知つてるもんかね、他

でおきよなさい』こゝいはれたから、仕方なしに、伊伴は又其次の百姓の所へ行つて、同じ事を聞きますと、又同じ様にいはれました。夫からして、三番目の人の處へ行つて、聞きました所が、其人の申しますには、

『まゝお待ちなさいよ、王國を貰うには、お前さんはまだ年が若すぎるし、お金を貰つても、すぐに失くなるし、だから一番いいのはいゝお女房さんを貰うこつた、すれば一生お前さんは仕合はせに暮らせるから』

そゝ聞いて、伊伴は早速、天女の所へ駆け戻つて、其通りに願つて置いて、さて道を急いで行きました所が、大きな木の下に綺麗な池がありました。『アー綺麗』だと思つて見ると、其木

の枝から鳩が三羽飛んで来て、三羽とも、同じ様に羽を脱いで、其池の中へ這入って行きました。伊伴は夫を見て、はて妙だなと思つて居ますと、鳩だと思つたのは間違で、眞實は三人とも奇麗なく、お姫様であつたのです。さて三人のお姫様がやつと水を浴びてしまつて、さて池から上らうとした時に、一番年下のお姫様の衣服が、ズーっと水に流されて仕舞つて居たので、其お姫様は大變にお歎きになつて居ましたから、伊伴はお氣の毒に思つて、すぐ泳いで行つて取つて来て上げました所が、お姫様は、大層伊伴の親切をお喜びになつて、其お禮にといふのでとしく、伊伴のお嫁さんになりました。

夫から、二人連れ立つて、一番近い村まで來まして、先づ家



を建てよーといふことになつて、伊伴が山から、木を伐つて來ました所が、お姫さまが、すぐ夫で家を立て、仕舞ひました。すると、其の村に居た殿様に一人の悪い家來が居りましたが、此お姫様を見て、殿様に申しました『どーも、伊伴の所のお姫様は、大したものので、美しいことは、此上なしたし、夫に利口で、器用で、實に珍らしいお嫁さんだからあのお姫様を、取つて來よーでありませんか』と、大變に悪い事を勧めました。そこで、どーして取つて來よーかと、だんく考んがへた末、其家來が申します。『何でも六ヶしい問を出して、若し伊伴が夫に答へることが出來んければ、お姫様をこちへ遣せといひつけましょー』といった所が、殿様も『なるほど』といつて、とーく

伊伴を呼びよせました。其問題といふのは、次の様なのです。

『お日さんが、西に沈む時に、眞赤に見えるのは何故か』

伊伴は何事かと思つて、殿様の所へ行くと、其事でしたからさし、大變に弱り込んで、涙を流して家へ戻つて來ました。すると、お姫様は、其譯を聞いて、『ア其問ですか、一體妾は、もとはお日様の娘なんだから、お日様の事なら何でも知つて居ます。ですから、其答は妾がして上げませう。是はこゝいふ譯なんです。丁度お日様が、西の海へ沈む時には、三人のお姫様が、お日様から出てくるので、眞赤になつて見えるのは、つまり其お姫様のお姿なんです。さし、早く殿様の所へ行つてそゝ仰いな』

夫で、伊伴は、やっと安心して、すぐ殿様の所へ行つて、其譯を申しました。すると、殿様の方は伊伴の物知りなのに皆吃驚しました。夫丈けでお仕舞にはしません。又悪い家來の申しますには『オ、夫が分る位なら、餘程豪ひ、今度は一ツ地獄へ行つて、地獄の様子を見届て來るのだ、是が出来たら、許してやらう』そこで、伊伴が歸つて、お姫様に相談しますと、お姫様は、『地獄へ行く道は、妾が教へて上げるが、併しお前さん、一人で行つて來て殿様に申し上げた所が、誰か證據人でもなければ、眞實にしないでしょーから、他に一人連れて行かねばなりません』と申しましたので、伊伴は殿様に申し上げて、とーくあの悪い家來と一所に行く事になりました。

そこで、伊伴と殿様の家來と、二人連れ立って、だんく急いで行って、やっと地獄の門の所へ着くといふと、其處には閻魔王が疾つくから待って居て、二人の來るのを見るや否や、不意、其家來を取つ捕まへて「コラ犬め、余っ程前から、貴様の來るのをこゝで待って居たのだ、今に其方の主人も呼んでやるぞ」と大聲で、怒鳴りながら、とうく門の奥の方へ、引っ張り込んで行きました。

伊伴は、之を見て、吃驚仰天、其儘一人で飛んで歸って殿様の所へ行きますと、殿様は、「家來はどうした」と聞きましたので伊伴は前程のことを話して、殿様も、今に呼ぶんだと云って居たといふことを申しました所が、殿様は夫を聞いて、大變に

恐ろしがつて、今迄悪かつた事を すっかり後悔して、夫から  
後は、伊伴夫婦を大變親切にしてやりましたので、伊伴は何時  
までも、お姫様と一所に仕合せに暮しました とさ。

めでたしく。

